仮面ライダー×仮面ライダー フォーゼ＆OOO&W&DCDfeatEVA NOVEL大戦COSMO

XX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー　フォーゼ＆ＯＯＯ＆ａｍｐ；Ｗ＆ａｍｐ；ＤＣＤｆｅａｔＥＶＡ　ＮＯＶＥＬ大戦ＣＯＳＭＯ

【Ｎコード】

Ｎ２５０４Ｙ

【作者名】

ＸＸ

【あらすじ】

三つの世界に運びいる三つの欲望
一つは破壊者の世界に運びいる世界の破壊
一つは全ての再構成の集まった世界に運びいる世界の終末と再生
一つはライダーのいない世界に運びいる世界のやり直し
それぞれの言葉は違えどそれは全て同じ意味を持った欲望
世界の破壊者と呼ばれたディケイド

二人で一人の仮面ライダーWと欲望の王オーズ
そして新たなる仮面ライダー、フォーゼ
三つの世界を守る４人の仮面ライダー、そして三つの世界に運び居る欲望が一つになった時、戦いは宇宙へと舞い上がる！

仮面ライダーディケイド（前書き）

自分の世界に辿り着いた門矢士、時折旅に出ては世界の物語を繋いでいた士達は、世界の崩壊を止める最後の旅にでる！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

仮面ライダーディケイド

後にＡＮＧＥＬ　ＡＴＴＡＣＫと呼ばれることになった仮面ライダー達とゼーレの戦いからはや４年の年月が流れた。
それぞれ、旅に出るもの、幸せを掴んだ物さまざまな道を選んでいるが、まさに平和そのものと言えよう。
光写真館
「帰ってきたか」
「僕としてはお宝も手に入ったし満足だけどね」
「あのなぁ…」
背景スクロールを見て呟く士、相変わらずな海東。そしてそんな海東に苦笑するユウスケ。自身の世界を手に入れたものの、気まぐれで旅を続けている光写真館一行。どうやら別の世界に旅に出て帰ってきたばかりのようだ
「でも、大樹さん。それって確か…」
祖父栄二郎の入れたコーヒーを持ってきた夏海が海東の持っている物を見て顔を真っ青にする
「そう！これはジュエルシードと言う、魔法少女には無くてはならない物だよ！まさに魂そのものだからね最高のお宝じゃないか！！」
「んな訳あるか！！」
あっけらかんと言い放つ海東に何故か片腕だけをＲＵクウガの物にして殴るのはユウスケだ。海東は撃沈。そしてその海東を無視して士達はジュエルシードを前に話し合いを始める
「で、どうする？もう一度行くとしてもまたあの世界に行けるかどうかは限らないぞ？」
「ですよね…。ああ！ごめんなさい！！皆さん！」
「まあでもあれが悪い訳だし最悪土下座でもいいし首刎ねて差し出しても良いしね」
「ユウスケ、それは過激すぎます。せめて半殺しで」

「譲歩になってないぞ？夏海」
士が中心になって話を進めるが、ユウスケの過激な案に結局まとまらなかった
「どうしたんですか？」
「いやあな、海東の奴が魂の塊であるジュエルシードとか言う宝石を盗んできてな」
「随分と大変な事になっていますね」
「ああ、そうなんだ…ってお前は！！」
「お久しぶりですね、ディケイド」
いきなり士の後ろに現れたのは管理者である紅渡だ。いつの間にか辺りは夜の町並みに変化している。そして渡は士に向き合い口を開く
「ディケイド、これからあなたには最期の旅に出てもらいます」
「最期の旅…だと？」
渡の発言に士は首を傾げた。確かディケイドの空間移動能力は健在の筈。一体何故、最後の旅なのかという訳だ
「言葉足らずでしたね。正確には崩壊の危機にさらされる世界への最後の旅です」
「つまりは、その世界を俺に救えという訳だな？」
「そういうことです」
微笑みながら渡は士の問いに答えた
「それでは朗報を期待していますよ。ディケイド」
そう言ってまた辺りは写真館に戻った
「士君、どうしたんですか？」
「いや、なんでもない（最後の旅だと？まさか世界の崩壊は収まったというのか？）」
夏海が心配そうに顔を近づけているが士は意識を思考の海に落としていた
「みんな居るかい？クッキーが焼けたよ…ってわわわ！！」
クッキーの入った皿を放り出してこけるのはこの家の主である光栄二郎。無論クッキーの皿は復活していた海東がキャッチしていたが。

そして背景ロールに激突した栄二郎。その衝撃で背景ロールの絵柄が変わる
「ディケイドの…紋章？」
「まさか…ディケイドの世界？」
世界の破壊者ディケイドディケイドの世界を巡り、その瞳は何を見る
これは、かつて世界の破壊者ディケイドと呼ばれた青年門矢士と門河テル。そして二人の仲間達の新たなる物語である…

仮面ライダーディケイド　ＦＩＮＡＬ　ＳＴＯＲＹ～ディケイドの世界～

人は何のために生きているのだろうか？俺はこの質問こそが人類の永遠の謎だと考えている
結論を言えば人は自分の為に生きている。他人なんかどうでもいい、自分さえよければいい、それが人間の本性だ
いくらきれいごとを並べようと、いくら人のためと言おうと結局は自己満足でしかない。しかもその善意は時に悪意に変わる。誰かは忘れたがこんなことを言った人も居る『一番たちの悪いのは善意だ』と。事実、アフリカの難民達を救うために送った物資だって、何かしらの災害で被害を受けた被災者に送った物資だって、たとえ善意だとしても当事者達が望んでいるものと違うのなら何の意味も無いだろう。役に立たないのだから
そういう押しつけの善意ならいらない。それは偽善だ、ただの自己満足だ。だからといって偽善を否定する訳でもない。だって人は皆

偽善者なのだから。
人は与えられた情報でしか物事を見ないし、感じようとも、考えようともしない。それは仕方ない事だ。俺だってそんな人間だ。あくまでも俺の考えだから批判は甘んじて受け入れよう。それもまた一つの意見なのだから、それによって自分の視野が広がればなおの事いい。新しい視点から物事を見る事が出来るのだから、新しい発見があるだろう。それもまた面白い
だから俺は人間を悲観しない。まあ、他人の事なんて知ったこっちゃないし、分かってやろうとも思わないが。人間は自分の本性を隠すから、分からない事だらけだ。些細な事で争いと起こす。まあ、人の歴史は争いの歴史なのだから、あながち間違っていないんだがそうそう、争いで思い出した。こう考えるとイジメだって無くなる事は無いだろう。どっかの馬鹿はいじめた方が一方的に悪いと言うがそれはおかしい。いじめられる方も悪い、だっていじめられるのはたいてい抵抗もしないし、やめての一言も言わない。言ったとしてもどうせ終わらないだろうが、だからといって暴力に頼るのもどうかと思う。結局、人は力を持てばそれを使いたがるから…だから原爆投下の悲劇が起こった。
さて、長ったらしく前置きをしたが、これは俺個人の意見として考えておいてほしい。いきなり地の文をやってくれと言われてとっさに思いついたのだからそこは勘弁してくれ
さて自己紹介といこうか、俺の名は門河テル。仮面ライダーディケイドだ。これでも１８歳と青春まっただ中の筈なのだが特に何も思う事は無い。逆に青春と言う言葉に嫌悪感を持っていたりする。まあ、そんな事はどうでも良い
え？授業はどうしたって？別につまらないから抜け出したんだ。日本の中でもトップクラスの進学率を誇るっていうから一部には無理を言わせて一緒に受験して、合格して通っているが、手応えが無さ過ぎる。兎に角、自分の限界を知りたかったから特進科を選んで受験したの言うのに、まったく持って限界が見えてこない。不思議な

物だ
今思うとこの国の最高学府だって手応えが無い。模試なんて常に合格判定Sだし、後は出席日数さえ確保しておけば問題無し。毎日が退屈過ぎる。特に何も起こらないし平和そのものだ。…逆に平和ボケしないか心配だが
「おーい！テル！！何辛気くさい顔してんだよ！」
「ああ、カイオとカズヒトか」
廊下で歩いていた俺に声をかけてきたのは、小学生からの友である、福沢カイオと吉山カズヒトだ。二人は普通科なので滅多に会わないのだが、俺が普通科の校舎に来てるからあったんだろ
「それにしても特進科のエースが普通科になんのようだよ？」
「何言ってんだ。どいつもこいつもガリ勉ばっかでつまらないんだよカズヒト。普通科の奴らの方が人間味があっていい」
「それって俺らが馬鹿ってことか？」
「よくわかったな、カイオ」
「お前な！！」
「冗談だ」
こいつらをからかった方がよっぽど楽しい。特進科のガリ勉共はまったく持って冗談が通用しないし、面白くない。休み時間でも教科書やら問題集やらを広げてる。あほらしい、そんなに必死になって特進科にいるなら、普通科でトップ争いをした方がよっぽど楽しいだろ…と俺は思う。ちなみにこの意見を一回口にしたのだがその後ハルカに切り刻まれるとこだった。いやー、冷や汗物だった
「でもってエンマとハルカは？」
とりあえず、一番親しい二人の所在を聞いてみる。先に答えたのはカズヒトだった
「あーっと、エンマは補習中で、光さんは職員室」
「エンマもここに進学したんなら頑張らないと留年だぜ？今までギリギリのところで進級してたけどさ」
「まあ、エンマは俺が無理言って此処に来させたからな」

カイオの言葉に苦笑しながら答える。あいつの幸運体質はどうでも良い所で発揮されるのが大抵だ
「おらお前ら！カズマサ様のお通りだ！道をあけろ！」
いきなり馬鹿が吠えてきた。どうも奥の方にいかにも成金の息子ですよと言った感じの男子生徒の姿が見える。あんな豚みたいな奴が廊下を歩いたらさぞかし迷惑だろう
「聞こえてるのか！」
「聞こえてない。聞こえない。馬鹿にかまうな馬鹿がうつる。これ、俺の考え」
「貴様！」
いきなり殴り掛かってくる馬鹿Ａをとりあえず鳩尾に一撃入れて黙らせた。何でおれはこうも面倒事にことあるごとに巻き込まれるのだろう。俺の平穏な日々はいつに？
「特進科では見かけないから普通科か。一体どんだけ威張ってるんだ？」
「何でも、国会議員の息子らしいぞ？」
「つまり親の七光りか」
呆れた。４年経てば国会議員なんて職を失うというのに。俺の記憶だと、今世間では解散総選挙の噂が流れてた筈だが
「来たぜ」
「あんなの廊下を歩いてたら迷惑この上ないな」
近くで見ると出来る事なら一生かかわり合いを持ちたくないような奴だ。顔みてるだけで苛ついてきた
「おい、道をあけろ！」
「断る。お前に指図される筋合いは無い」
どうやら取り巻きであろう馬鹿Ｂが言ってくるが適当にあしらっておくか。この手の馬鹿は関わりを持たない方が良い
「お前見かけないな？特進科の奴だな？」
「お前に答えて何になる。自分が損するような情報は流すつもりは無い」

無表情で会話をするのは得意中の得意だ。動揺なんて見せた瞬間に終わりだしな。にしてもテンプレート通りだな。ホント、不良とかには絡み方の教科書でもあるのか？
「どうなっても知らないからな？カズマサさまに歯向かった事を後悔すると良い」
「ならその逆も然り。俺を起こらせない方が得策だぜ？お前らも俺に関わって後悔するなよ？」
覚えてろ！と言いながら馬鹿Bはカズマサとか言う男子生徒の元に行く。どんだけテンプレート通りなんだよ。あほらしい
「おい、テル？」
「大丈夫だ。国会議員だかなんだか知らんが、俺の人脈を甘く見てもらっては困る」
実際個人的なつながりでなら天皇陛下だろうと、アメリカの大統領だろうと、国連事務総長だろうと、世界の要人達に繋がる人脈は持っている。どこまで使えるかどうかは試した事が無いので分からんが、情報は結構入ってくるので便利この上ない
ん？何か取り巻き共が何か取り出した？あれは…ガイアメモリだと？
「どうする？テル」
既にカイオはカイザギアを腰に巻いている。別に変身しなくたってこんな奴ら…
「いい。マスカレイドメモリ程度なら変身しなくても……」
既に馬鹿共はマスカレイドドーパントになっている。…後でユキタカに連絡しておいて実験台にしてもらうか…。こんな奴らは…
「生身でも勝てる！」
多分この時他人から見れば俺の瞳は紅と翠に輝いていただろう。俺が人について疑問に思い、そして軽蔑する理由の一つ
「お前！ば…化け物か！？」
この瞳を見た奴らはたいていそう言ってくる。だけどな…
「傍目から見ればお前らの方がよっぽど、化けもんだよ！！」
俺の右手に力が集まっていく、そして巨大な弾丸となり、あいつら

に照準を合わせる。俺が持つ、人の域を超えた力。その代償は自身の命
「天空の雄叫び、ルッジート・ディ・チェーリ！！」
周りに被害が出ないように、自分に負担がかからないように威力を最小限に押さえた一撃で、メモリブレイクを完了させる
「つっ…。やっぱり少し無茶したな…」
右手に激痛が奔った。よく見ると筋が切れてるし腕は変な方向に曲がっている、どうもあの戦いが終わってからから調子が悪い。さすがにレジェンドコンプリートを使ったのは拙かったかな？
「大丈夫かよ？」
「なんとかな。でも…大丈夫だ」
俺の力は二つ。時空制御と天候操作だ。何故そんな力があるのかは教えるつもりは無いが…。とりあえず、時空制御の力を腕にかけて傷を治す。ついでだからさっきの攻撃で壊れた箇所にも力を使って元通りに復元する、証拠隠滅完了！
「さてと、さっき気づいたんだが、別世界から来訪者が来てるようだな。…カイオ、ちょっと学校抜け出すから後よろｓ「いや、お前特進科だろ！？俺は普通科だ！」…わかったよ」
最後まで言う事が出来なかったので、とりあえず昼休みまでは授業に参加しよう。にしても、誰だろうな…妥当な線としては渡か剣崎か…大穴で士も考えられるな…

〜〜〜

という訳で昼休みになった事だし、先生はうまく騙してから校門を出る。まあ、早退に関しては問題ないだろう。別に内申無くても試験で１００点それば問題ない。とりあえず、時間を潰すために行きつけの喫茶店に来たんだが…
「光写真館…ということは」
兎に角、入るかと思った矢先にドアが開き、中から見覚えのある男

女が出てくる
「お前は…門河！？」
門矢士。原点（オリジナル）の仮面ライダーディケイドある意味再開を楽しみにしていた男だ
それにしても、あいつらも気配を消すのが下手だな
「よっ、久しぶりだな士。だが、再開を喜んでいる暇はなさそうだ」
「のようだな」
俺達を囲むようにして現れたのはショッカー戦闘員だ。そういえば、何チャラショッカーとか言う組織があるってユキタカが言ってたな。とりあえずそんなことはどうでも良いので、デルタドライバーを腰に巻く。士や夏みかん、雄介のリイマジも既に経にｓん準備ＯＫか
「変身！」
［スタンニンバイ　コンプリート］
デルタに変身する。ディケイドは基本的に使わない。カードを使うのが面倒だからだ。本気で戦うときはディケイドを使うけどな
「ユウスケ！夏海！行くぞ！」
「「「変身！！」」」
［カメンライド　ディケイド！］
［かぁ～ぷ♪］
ディケイド、キバーラ、クウガ。世界の旅人達がその姿を見せた
「行くぜ…！」
俺は士達に、なによりも自分にそう言った

～～～

さて、なんとかあれを撃退した後、士達から事情を聞いてから学校に向かった。どうもこの世界での士の役割は俺達の通っている高校の教師らしい。さらに俺が所属している部活の顧問というおまけ付きで
「なあ門河、この万部って何なんだ？」

「万屋ってあるだろ？」
「ああ、何でも屋って奴だよな」
「万部はまさにそれだ。部活の助っ人や地域の人達からの依頼の解決…あげくの果てには臨時教員と多種多様だ」
「最後のにはツッコミを入れた方が良いのか？」
「臨時教員は極端な例だ。普通ならそんな依頼は来ない。でもってここが万部の部室だ」
普通科の校舎の一角にある今は使われていない古びた応接室。ここが万部の活動拠点だ
「ユキタカー、いるかー？」
とりあえず、殆ど此処に入り浸ってる生徒…俺の友達の一人である山谷ユキタカがいるかどうか見てみる。パソコンがあるってことは此処に居たな？
「あー、カイザギアの保守点検か。そういえば、ザビーゼクターとかどうした…成る程な」
忘れてた。ユキタカの奴、大の虫嫌いだった、虫見た瞬間にクロックアップレベルのスピードで逃げ出すから、カブト系のライダーシステムの点検は俺の役目なんだよ…
「というか、ここって本当に高校か？」
「一応な。というか万部が異常なだけだ。設計図さえ見てしまえばその機械を作り上げ管理することが出来るメカニック山谷ユキタカ、ダメダメのくせして幸運体質の門矢エンマ、異常な強さを持つ女剣士光ハルカ。後の二人は基調な普通福沢カイオと吉山カズヒトだ」
「確か部活の公認される条件は…部員が5名以上、顧問が居る事。だったな」
「あと部長が決定されている事。部活が出来てから一ヶ月以内、世代交代した場合は半月以内に決定する事だ」
とりあえず備品のコーヒーメーカーでコーヒーを煎れながら話を続ける
「さてと士、お前が来たって事はこの世界が崩壊に向かってるって

ことだよな？しかも管理者であった俺が対応出来ない程の」
「ああ、多分な」
「ということは心当たりはある。多分あいつの…」
俺が最後まで言い切る事は出来なかった。何故なら…
「テル君！あいつが！！」
エンマの乱入と、外からの爆発音。そして…
「出てこい、もう一人の俺…次はこの世界を破壊する！！」
黒き破壊者、仮面ライダーダークディケイドの襲来のせいだ
「ゼロ…あいつ！！士！エンマ！行くぞ！！」
俺はエンマと士にそう言って後部室を飛び出した。すぐにエンマと士は追いかけてくる
「カイオ君とカズヒト君は？」
「あいつらは自力で行くだろ！」
とにかく一般生徒に被害が行かないように食い止めないとな

FINAL　STORY～ディケイドの世界～

「なんでここにあいつが！」
「しらん！」
カイオとカズヒトはダークディケイドの姿を窓から確認するとすぐに外にでていた
［9…1…3…スタンニンバイ］
カイオはカイザフォンにコードを入力してエンターキーを押し、カイザフォンを閉じて右肩まで持って行く
「来い！ザビーゼクター！」
カズヒトはザビーゼクターを呼び出す
「「変身！！」」
［コンプリート］
［ヘンシン　チェンジワップス］
黄色いフォトンブラッドに包まれてカイオは仮面ライダーカイザに、カズヒトは仮面ライダーザビーに変身する
「ほう、カイザとザビーか」
「やっぱりあいつと同じ声で言われるとムカついてくる」
「カイオ落ち着け」
テルに似た相手を小馬鹿にした口調で話すダークディケイドに対して不快感をあらわにするカイザ。何やってんだか
「行くぜ…」
［レディ］
カイザはカイザブレイガンにミッションメモリーをセットして、ダークディケイドに切り掛かって行く
「ほっ、っと」
ダークディケイドはそれを軽く受け流しながら後ろに下がる
「カズヒト！」
「分かっている！」

ダークディケイドの背後にはクロックアップを使って移動したザビーの姿が、このまま挟み撃ちにしてしまおうという作戦だったようだが…
［アタックライド　セイリングジャンプ！］
「よっと！」
スカイライダーの能力ではるセイリングジャンプでダークディケイドは空を飛ぶ
「なっ…！！」
カイザはカイザブレイガンを後少しという所でザビーに振り下ろしそうになるが、そこはうまくこらえて構え直す
［ブラスターモード］
「このやろ！」
「我武者らに撃ってきた所で何もない」
カイザブレイガンをブラスターモードにしてダークディケイドを攻撃するが、攻撃されている筈のダークディケイドはそれを避けて行く
「カイオ！落ち着け！！校舎に被害が行く！！」
と言いつつもザビーは校舎に向かって行く流れ弾をクロックアップを使って落として行く
「これでおしまいか？」
ダークディケイドはカイザに向かってそう問いかける
［アタックライド　ブラスト！］
「なら今度はこちらの番だ」
ダークディケイドブラストがライドブッカーガンモードから放たれる
「っ…！？」
成す術も無く攻撃を受けるカイザ。これで終わりか…と思った時
「カイオ君！大地の重力、グラヴィダ・デッラ・テラ！！」
いきなり聞こえてきた声と共に、いくつもの星が現れてその重力で弾が全て引き寄せられた
「エンマ！？」
「無茶するからだよ？」

「煩い！！」
［エクシードチャージ］
エンマはカイザに駆け寄るがカイザはそれを顧みずにカイザフォンのエンターを押す
「はっ！！」
「ぐっ」
カイザブレイガンから放たれた黄色の弾丸がダークディケイドを拘束する
「はぁあああああ！！」
そしてXの字をした黄色いポインターと共にダークディケイドを切り裂く。カイザの必殺技の一つ、カイザスラッシュなのだが…
［アタックライド　インビジブル］
ダークディケイドはインビジブルでその姿を消してしまう
「なに！？」
［ファイナルアタックライド　カ・カ・カ・カイザ！］
「しまっ！？」
そして背後から放たれたのはダークディケイドのゴルドスマッシュ。いつの間にかカイザポインターを召還していたのだ
［アタックライド　コンファインベント！］
だが、その一撃は消されてしまう
「大丈夫かー？」
上空から現れたのはジェットスラッガーで飛行するデルタとフォームライド・ブレイドJでカメンライドしたディケイドブレイドジャックフォームだ
「来たか、テル。それと原点の破壊者」
「へぇ、まだ俺も現役のようだな」
ダークディケイドの言葉に皮肉たっぷりに言うDブレイドJF。デルタは黙ったままだ
「今までつかずじまいだった決着を付けようぜ？そしてどっちが本物なのかをな！！」

［アタックライド　ブラスト！］
ダークディケイドはブッカーガンモードでデルタを撃つ
「黙ってろ」
だがその弾丸をデルタはデルタムーバーの弾丸で全て相殺した
「今だ、ライダースティング！！」
［ライダースティング］
「ぐおっ！？」
今まで蚊帳の外だったザビーがダークディケイドが油断している所に必殺技のライダースティングを炸裂させる
「お前には用はない！消えろ！！」
「がはっ！」
だが目立った一撃を与えられなかったようでザビーはダークディケイドに殴り飛ばされる。そのまま壁にぶつかって変身解除された
「相変わらず…か」
デルタはそう呟いた後、変身を解除した
「ゼロ、お前は何故そこまで本物偽物にこだわる。お前は俺の破壊本能の具現化した存在。それなら俺と同じだろうが」
「だからこそだ。俺の破壊本能は俺を生み出した存在すらも破壊したいと言う訳だ」
「そうかよ…なら」
テルはディケイドライバーを腰に装着する
「此処で…倒すのみ！変身！！」
［カメンライド　ディケイド！］
テルはディケイドに変身する
「士。お前は手を出すな」
「おいおい、客に向かってそれは無いだろうが。手伝わせてもらうぜ」
「…好きにしろ」
3人のディケイドはライドブッカーをソードモードにして構える
「うおおおお！！」

先に動いたのはＤブレイドＪＦ。空中からの一撃にダークディケイドは翻弄される
「そらよ！」
そこにディケイドの一撃が入る。だがそこは流石と言うべきか瞬時に反応してガードする
「後ろががら空きだ！！」
［エクシードチャージ］
だがそこにカイザがカイザポインターを足に取り付けダークディケイドにゴルドスマッシュを叩き込む
「ぐっ…」
［ファイナルアタックライド　ブ・ブ・ブ・ブレイド！］
「はぁあああああ！！」
そこにＤブレイドＪＦのライトニングスラッシュが決まる
「馬鹿…」
だがディケイドは有利な状況にも関わらず一回ダークディケイドと距離を置く
「おい、テル！何やってんだ！！さっさとトドメを…」
カイザは最後まで言う事が出来ずに地面に叩き付けられた、と思ったら直ぐに宙を舞い、そして落とされる
「カイザ！？っどわ！？」
すぐにカイザに駆け寄ろうとしたディケイド（士）だったがいつの間にか宙を舞い、地面に落とされる
「弱い」
そしてディケイド（士）を踏みつけるようにして現れたのはダークディケイド。いつの間にかアタックライド・クロックアップを使ったのだろうか
「世界の破壊者と聞いていたからな。どんな物かと楽しみにしていたがこのざまか」
「が…あ…！」
「死ね」

「君がね」
［ファイナルアタックライド　ディ・ディ・ディ・ディ・ディエンド！］
エンマの変身したディエンドのディメンションシュートが放たれ、
辺りは煙で覆い尽くされる
「くっ！？」
ダークディケイドが煙を払ったときにはそこにはテルの変身したディケイドしかいない
「お前は残ったのか？」
「最後までやっとかないと気が済まないからな」
「確かにな」
［［ファイナルアタックライド］］
行なわれるのは必殺技のぶつかり合い
［ディ・ディ・ディ・ディケイド！］　［ダ・ダ・ダ・ダークディケイド！］
「「はぁあああああああ！！」」
最近は顔を合わせればこれで終わらせる二人だ。そして結果は…
「っと」
「っ…」
引き分け。ダークディケイドはすぐにオーロラを使って姿を消す
「ちっ、やっぱりガタきてるか？」
ディケイドは膝をついて荒い呼吸をしている
「とりあえず、行くか」
ディケイドは変身を解除してすぐに立ち上がると大騒ぎする生徒と教職員達を尻目に学校を後にした

〜〜〜

テルの自宅
「…で、此処に来たってこと？」
「そう言う事…」

玄関には仁王立ちしている少女とそれに弱気な笑みで会話をするエンマという不思議な構図が出来上がっていた
「まったく。何でこう、兄さんは巻き込まれ体質なんだろう…良いわ。エンマさん、怪我人はお兄ちゃんの部屋に放り込んどいて」
「ごめんね。ありがとう、サヨちゃん」
サヨ、それが少女の名のようだ。若干テルの弟であるコウガに顔立ちが似ているが、そこは気にしないことに…することも出来ないようだ
「ただいま」
「あ、兄さんお帰り」
テルが帰って来たからだ。カイオ、カズヒト、エンマの荷物を持って
「ごめん、テル君」
「別に」
エンマは自分のバックを受け取った後、二階に上がった
「悪いな、サヨ。あ、救急箱出しといてくれ」
「わかったわ」
テルは一回洗面所に言って律儀に手を洗ってうがいをした後、サヨから救急箱を受け取って自分の部屋のある二階に上がった
「さてと、大丈夫か？お前ら」
「背中打った」
「体の節々が痛い…」
「俺は大丈夫だ」
とりあえず、ボロボロになっているカズヒトとカイオに手当をした後、士が話しかけてきた
「なあ門河」
「ん？」
「お前さっき俺の破壊本能から生まれたって言ってたよな」
「まあ、それに近い事は言ったな」
「それってなんなんだ？」
「話しておくか…」

テルは一息置いた後口を開いた
「門河家は代々、常人ではあり得ない運動神経、もしくは頭脳を持っている。そしてそれは生まれつき決まっていて、大抵は隔世遺伝という形で受け継がれる」
「つまり、じいさんが運動神経抜群だったら自分も運動神経が良いってこと。という事は親父さんは頭がいいってことだな？」
「そういうことだ。俺のじいさんは運動神経が高かったから本来なら親父は頭脳明晰の筈だった…が」
「が？」
カイオがテルの言葉の切り方に違和感を感じて会話に入ってきた。ちなみにテルの境遇について知っているのはテルの親族とハルカ、エンマだけである。そのためカイオとカズヒトは聞き耳を立てていた
「親父にはそう言う能力が無かった。それは何を意味するか、答えはこれだ」
テルは自身の瞳を紅と翠のオッドアイに変えた
「隔世遺伝がさらに隔世遺伝を起こして、周りに回って俺に影響したんだ。だから俺には頭脳も運動神経もあるんだ」
「だから成績は常時オール5、運動神経もプロ並みなのか」
カズヒトは合点がいったらしく手を叩いた
「まあ、デメリットもあるがな」
「超巻き込まれ体質と不幸体質だよね」
「その通りだ、エンマ。ついでに言うが、この状況下だと俺の不幸体質はエンマの幸運体質で相殺されている」
「でもって、コウガが運動神経を、サヨちゃんが頭脳を持ってるのよね」
「ハルカか」
話の途中で入ってきたのは漆黒の長い髪に日本刀を腰に下げた少女、光ハルカ。テルの幼馴染みであり、何かと関係を噂されるが真相は不明。ちなみにテルに言わせると異常な強さを誇る女剣士らしいが
「そういえばサヨって、俺にも小夜っていう妹がいるんだが…」

「へー。サヨは俺の妹だ。ちなみに今は此処にいないがコウガっていう弟もいる。ちなみにコウガとサヨは双子だ」
士の問いかけに意外だなといった表情でテルは話だ。つまり双子の兄妹はコウガが運動神経を、サヨが頭脳をそれぞれ持って行ったらしい
「それにしても、ユキタカの奴はどこ行ったのかしら？」
「そういえば見かけないね」
ハルカとエンマはまったく姿を見せない万部の部員の所在について話し合ってたが…
「そういえば、アストロスイッチの調整が終わったから実験してくるとか言って、コウガのとこにいったんだっけな」
テルが所在を思い出したらしい
「ということは戻ってこないね」
エンマが分かり切っていることを言った後、士を除いた一同はため息。そして此処にはいないテルの弟、コウガに同情していたのだった
「で、話を戻すけど、俺の特殊能力もそんなイレギュラーな事例によって世界と反発して生まれたんだ。士達はアスラクラインの世界にいったか？」
「ああ。一応な」
そう言って士が懐から取り出したのは黒の拳撃とかかれたアタックライドのカードだった
「ＯＫ、それがあるなら話は早い。そこでの悪魔の魔力の源はなんだ？」
「世界との摩擦…そうか！」
「ああ。俺の力は世界との摩擦によって自身の命と引き換えに放たれてるんだ。俺の目算だと、俺の寿命は持ってあと６０年かな？」
「充分だと思うけど…」
「実際はガンダム００の世界でいろいろあったからまだ大丈夫なんだがな」
とりあえず、ここで話は一段落したのかハルカがサヨから受け取っ

たらしいコーヒーをすする
「ん、うまいな」
士はその味に目を丸くした
「さてと、それでもってこの後なんだが、ゼロの奴がどう動くかで変わって行くんだけど…「兄さん！」…どうした？サヨ」
「それが、いきなり玄関におっかない人達が！！」
「ん？」
サヨが言う通りに外の除いてみると、妙におっかない風貌の男達がいた。しかもそれを仕切っているのは…
「げ、あの糞デブかよ」
テルが啖呵を切った相手である国会議員の息子カズマサだった
「クッダラねえ。…あいつらオルフェノクとワームか」
呆れた口調で悪態をつきつつ外を見ているのと男達がオルフェノクとワームになったのだ
「テル、俺達にやらせてくれ」
カイオは既に変身準備万端になっている。カズヒトもザビーブレスレットの調子を確かめていた
「…！此処は頼んだ。あいつが来た。士、行くぞ」
「ああ」
テルは目を紅と翠のオッドアイに変えると空間の断層を作り、士と共に消えて行った
「いくぜ、カズヒト」
「オーライ」
［9…3…1…スタンニンバイ］
「「変身！！」」
［コンプリート］
［ヘンシン　チェンジワップス］
窓を開けて屋根の上に飛び出すと、二人はそれぞれの変身ツールを使ってカイザとザビーに変身する
「使って見るか」

そしてカイザの左腕にはリストウォッチ型のツール、カイザアクセルがあった。ちなみにファイズアクセルの色違いである
「先に行ってる」
［クロックアップ］
ザビーはクロックアップで高速移動空間に入るとワーム達に攻撃を仕掛けて行った
「俺もいくか」
カイザアクセルに取り付けられたアクセルメモリーをカイザフォンにセットする
［コンプリート］
胸部アーマーが四方向に展開する。フォトンストリームが銀色になり、複眼は黄色になる。これこそカイザの超高速形態、カイザアクセルフォームだ
［レディ］
ミッションメモリーをカイザブレイガンにセットして、カイザアクセルのスタータースイッチを押す。さらにカイザフォンのエンターを押した
［スタートアップ］　［エクシードチャージ］
「お前らなんかに…」
カイザブレイガンから放たれた光弾が次々とオルフェノク、ワーム関係無しに拘束して行く
「負ける訳ねえんだよ！」
「同感。ライダースティング！」
［ライダースティング］
ザビーはライダースティングを発動させ、カイザが取りこぼしたワームを次々と倒して行く
「はぁあああああ！！」
カイザＡＦは次々とオルフェノクとワームを切り裂いて行く
［３…２…１…タイムアウト　リフォメーション］
［クロックオーバー］

カイザＡＦは通常フォームに戻り、ザビーはクロックアップが終了する
カイザアクセルフォームのアクセルカイザスラッシュとザビーのライダースティング、二つの必殺技によりあっという間にオルフェノクとワームは殲滅完了。後は首謀者のカズマサだけになる
「くそ…お前らなんかに！！」
［コックローチ］
カズマサは苦し紛れにコックローチドーパントに変身して逃げようとするが…
［エクシードチャージ］
「はっ！」
カイザポインターから放たれたポインターがコックローチドーパントを拘束する
「はぁあああ！！」
そしてゴルドスマッシュが炸裂。だが、耐久性能をあげているのか、メモリブレイクはされない
「ライダースティング！」
［ライダースティング］
「そんなぁあああああ！？」
そこにザビーのライダースティングが炸裂し、コックローチドーパントはメモリブレイクされた
「さてと、警察呼ぶか」
「だな」
メモリブレイクされて意識を失っているカズマサをサヨから借りたビニールロープで縛り上げた後、サヨが警察に連絡し、カズマサは警察に御用になった
「テル達の所に行くか？」
「だよなぁ…」
カイオはサイドバッシャー、カズヒトはマシンゼクトロンを呼び出すと、それに乗り当ても無く走り出した

〜〜〜

町外れのとある廃工場

「ゼロ…」

「よう、テル。それに原点（オリジナル）の破壊者」

テルと同じようで少し違う笑いを浮かべるゼロ。テルと士は空間の断層を通ってここに来た

「成る程…ここなら周りに被害がでることもない…か」

「ああ。わざわざ苦労して探してやったんだ。さあ、楽しもうぜ！」

「ここで…全部終わらせる！」

士、ゼロ、テルの三人は自分の変身ツール…ディケイドライバーもしくはダークディケイドライバーを腰に巻く

［［［カメンライド］］］

［［「変身！！」］］

［［ディケイド！］］　［ダークディケイド！］

ディケイドとダークディケイドはそれぞれ自身の武器を構える。士の変身するディケイドはさらにケータッチを取り出した

［クウガ　アギト　リュウキ　ファイズ　ブレイド　ヒビキ　カブト　デンオウ　キバ　ダブル　オーズ　フォーゼ…ファイナルカメンライド　ディケイド！！］

ヒストリーオーナメントにフォーゼのカードが足された、ディケイドコンプリートフォームになる

「さあ、始めようぜ」

ディケイドCFもライドブッカーをソードモードにして構えた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2504y/

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー フォーゼ＆OOO8

2011年11月19日10時12分発行